

シンポジウムを終えて

菊池勇夫

シンポジウム終了後に、シンポジストの一人である菊池勇夫氏から所感を預った。本報告の「あとがき」として掲載する。(企画者)

本報告は教養教育としての歴史(学)を念頭において、人々の声を聴くということを、具体例をあげて多少実践してみようという試みであった。近現代史は別にして、歴史学は今を生きている人に江戸時代の体験を聴くことなどできないので、記録を読むと報告のタイトルに付けた次第である。

歴史は役に立たない、役にたつと考えないほうがよいといったようなことを述べた。むろん、過去、現在、未来という時間軸でものごとを考えることは、文明史的な大きな変遷だけでなく、ごく身近なところでも自分のルーツや住んでいる地元の昔を知りたいという欲求まで広やかなものがあり、人間存在は歴史(時間)から逃れられない宿命にあることを色々な局面からうかがい知ることができる。

現代社会を分析し、その抱えている諸課題の解決にあたらうとする現在科学と違って、歴史科学は江戸時代を対象としていれば、江戸時代人がその社会にあってどのような問題を抱え、それに人々がどのように向き合って解決しようとしていたかが主題となる。その場合でも歴史研究者は現代社会に生きているので、その現代の眼差しからみていることになるが、そうではあっても、江戸時代人の目線をつとめて確保することが求められている。そのか

ぎりで現代と過去の対話であり、異文化社会の理解というのに近いといえるだろう。

歴史学は役に立たないと述べたのは、現在科学との違いを意識してのことである。本当は人間存在に関わるところで役に立っているといいたかったからであるが、教養教育としての歴史を学ぶ意味もおそらくそのようなところにあると考えてのことであった。それは高校歴史や大学教職課程の歴史概説、あるいはテレビの歴史教養番組の娯楽消費（むろん深く突っ込んだものもあるが）とは違った価値なのだろうと思う。

歴史は役に立たない、といったのは、歴史を役立たせ、利用することの功罪をよく知っておきたいという意味あいからでもあった。質疑のなかで、「美談」が取り上げられた。美談としての歴史逸話がかつての「修身」や今の「道徳」を想起すれば、教育の現場などでいくらかでも物語＝テキストとして使われてきた。歴史の政治利用ということはいつの時代でも今でも頻繁に行われている。都合のよい事実のみを拾い上げ、不都合なことは見てみない。それだけならともかく、事実をねじまげたりねつ造したり、最近の「フェイク」という言葉がそれを象徴している。また、虚構の世界での歴史もののキャラクターが史実はどうでよく、乖離し自在に飛躍を遂げている。

そして今や、歴史の観光利用も国策となり、地域振興の手段としてもはやされるようになった。観光して歩く楽しみ、観光を通して歴史を知る、ということは私自身も享受しているのであるが、役に立ちそうな歴史遺産、文化財を目玉にして、たくさんの人に訪ねてもらい、お金を落としてもらい、という経済発想は歴史学の役割とは違うのではなからうか。歴史遺産、文化財としての人類的価値を明らかにしていく学術的解明が本来の役割であり、観光に歴史が従属しているわけではない。指定された選ばれた文化財だけに歴史的価値があるのでなく、人間が残した痕跡に均しく関心が及ぶようなものでなくては、民衆生活史などというものは到底成り立たないのである。

使用される歴史、消費される歴史、自分たちに都合のよいところだけを利用して、必要なければ忘れてしまうような安易な歴史の利用は、突き詰めていくと歴史＝死者への冒瀆なのではないか。最近たまたま、哲学者の岸見一郎が三木清『人生論ノート』について書いたNHKのテキスト「100分de名著」（NHK出版、2018年）を読んだ。三木が「死」について述べた箇所から、「伝統の問題は死者の生命の問題である。それは生きている者の生長の問題でない。（下略）」という文章を引用して、つぎのように解説しているのが心にとまった。

彼（三木）がここで批判しているのは、過去を「絶対的なもの」としない考えかたです。過去を自分に都合のいいように解釈したり、利用したりすること。あるいは伝統という過去を、現代の視点から勝手に読み替え、過去そのものを変えてしまおうとすること。その危険性を三木は指摘しているのです。歴史を改竄したり、捏造したりすることは、どの時代にも行われてきました。（95～96頁）

教訓としての歴史、過去の人々（先人、死者）の経験や知恵に学んで今に生かそうということを、私自身も含めて誰もがふつうそのように思っている。「賢明な利用」となっている場合も少なくないであろうが、過去の人々の感情や意思などとはかけ離れた解釈や利用を行って改竄・捏造しかねない危険をつねに内包していることを、「死者（過去）」は「絶対」であるということによって気づかされる。歴史は役に立たない、といったのは、歴史を適当に使って欲しくないからであるが、歴史に謙虚に学ぼうという場合、立ち止って、まずは過去＝死者の声を聴き澄ますのでなくては、深みからの歴史の理解にはつながらないであろう。

教養教育としての歴史（学）の役割は、専門教育が实际的・技術的なもの

シンポジウムを終えて

(職業的なものと言い換えてもよい)を担うのだとすれば、そうではない、市民社会の誰にでもあてはまる、歴史を使う、歴史を扱うさいの基本的な作法・リテラシーということになるのであろうか。さらにいえば、現在にあって過去を省察しながら、将来の理想を展望するようなものであることが望まれているに違いない。「ねばならない」ではなく、「ゆらぎ」を大切にし、そこから出発していく、そのようなことを確認する機会となった。教養教育について開かれた場で語ることはほとんどなく、また文字化することもなかったのであるが、教養教育の場からのリタイアが近づいているとき、このような発表の場を与えられるとは思っても寄らなかったことである。企画者に感謝申し上げたい。

(2019年1月14日記)